

# 佐伯祐三贋作事件



## 白矢勝一

佐伯祐三は日本人画家の中で私が最も好きな作家である。ところがある日、紀伊国屋で落合氏の『天才画家佐伯祐三の真実』という本を買い衝撃を受けた。この本には信じられないことが多く書いてあった。

私は昔、佐伯祐三の「人形」を見てもう一度絵を描く気になった。素人が描いたように見えて、それでいて魅力がある。それらは妻米子が描いたものだというのである。米子は色々な男性とつきあっていた。米子の言うには「佐伯の絵は大雑把過ぎる。それで私がちよいと筆を加える。そうすると売れ

る絵になる。」そんな話である。

佐伯とその娘が命を無くしたのも米子に原因があること。二人は結核がもとで亡くなったとされるが、米子は佐伯と別居状態で娘を佐伯のところに残して他の男のところに行っていた。佐伯は娘をさる夫人に時々みてもらいながら生活していた。昔読んだ佐伯米子の「悲しみのパリ」はうそだったのか？

### 佐伯米子の手記「悲しみのパリ」から

佐伯は二回目にパリに来てからは、美の神につかれたかのように、夢中になって描き始めました。独特な画法を見出したのでしよう。素晴らしい敏速な筆触で、日に二、三枚も書き上げていきました。その速さで描いた絵が、すべて後日に傑作と賞賛されるものになろうとは……。

佐伯は結核で亡くなり、それから二週間後でございました。夜、ふと床の上起き上がった彌智子は「パパ、パパ」と大きな声で叫んだかと思うと、そのまま息を引き取りました。まだ、五歳の、あの無邪気だった幼子は母一人残して、父の後を追っていったのでございます。

父の佐伯と一緒にペール・ラ・シェエスの墓に埋葬しました。一時に二つの大きな宝を奪われて、私は危うく生きる力を失いそうになりました。すでにあのころ、何もわからなく

なっておりました佐伯が、不思議に、死を直感していたものか、メゾン・ド・サンテに入院する間際に、私を呼びまして、僕の絵を日本にもつて帰ってくれ、日本の皆様によくと申したことがございます。その言葉が彼の亡き後の私への仕事の教えでした。

米子は良妻賢母でなく鬼女だったのか？ 私は米子が精神的に異常ではなかったか調べた。

次のうち5つ以上あてはまると演技性人格障害が疑われるようになる。

1. 自分が注目的になつていないと楽しくない。
2. 他人との関係は、不適切に性的で魅力的・挑発的な態度をとる。
3. あさはかで感情を表に出す。
4. 自分への関心を引くために身体的外見を利用する。
5. 感情表現がオーバーなのだが、内容がついてこない。
6. 芝居がかった態度や誇張して表現する。
7. 他人や環境の影響を受けやすい。
8. 対人関係を実際以上に親密なものとする。

本来、米子には生来の《足の不具合》（4に相当）以下 ↓  
4と表記》、《男癖の悪さ》 ↓ 2》、《毎晩パリで食事会をしていた ↓ 1》など当てはまる項が多いと思う。また、数々

の語り、それも彌智子の死んだ歳などに関わることなどのからみで抽出してみる。

「座談会」から（みず多 昭和43年6月号）

朝日 …… 美校2年のとき結婚。それは本当ですか。彌智子を描いた絵が4枚あるのです。そのうちの1点、今山本さんのところにある、ルノアール風のもの、彌智子の一番小さいときだと思うのですが、ルノアール風をやっているときというのは卒業前後でしょう。そのときの彌智子の顔は、あの絵を見る限りでは、どうしても3歳くらいに見えるんです。3歳に見えるということはさかのぼっていくと、今の山田さんの説が正しい。

木下 そりゃあ、ヨーロッパに立つとき彌智子は歩いておつたもん。……（中略）

山口 我々がパリであったときに、子供が6歳くらいだったかな。それで死んだのは9歳ですか。その前に小学校に行つたんですよね。あつちで。

木下 小学校やない、幼稚園や。

……

〈白矢 独白〉 年譜には

1922年2月21日 彌智子 誕生

1928年8月16日 佐伯 死去

1928年8月30日 彌智子 死去

であるから6歳で死んだとしていいと思う。

当時、出生届は後で出すこともあった。事実私の生まれた本当の日は2ヶ月前で戸籍とは異なる。朝日氏は納得したようだが、彌智子は結婚前に生まれていたということなのか？ また「幼稚園や」というのは、どういうこと？ フランスでは何歳でその頃小学校に入ったのだろう。

それにしても米子は どうしてこんなにも嘘をつくのだろう。ひよっとしたら、自分の年も子供の年も自分なりに解釈して正しいと信じ込んでいるのかもしれない。ブラマンクに会う場面では里見はブラマンクが烈火のごとく怒ったように書いているが米子はやさしい人と書いている。これも疑問である。

### 〈米子の文章〉

ブラマンクは仁王様のように大きくてやさしい方でした。

私どもに大きな手を出して、雲の描き方を教えてくださいました。白いお皿に角砂糖と卵をのせて描いてごらんとおっしゃいました。それから、しばしばここへ絵を見ていただきました。( ↓ 3、5 )

### 〈筆者 (白矢)〉

米子は日本画をかなり日本で勉強していた。米子も他の友人が書いているが、佐伯と同じような絵を描いていたとある。

米子もブラマンクに絵を教えてもらっている。米子が絵を日本でのくらしい勉強したか、絵をやり始めた理由、止めた理由も書いてある。

### 〈米子の文章〉

2度目の渡航で、モンパルナスの近くを多く描き残しました。ガス塔と広告、工場や裸婦のデッサンには、キュビズムが入っていて、ものすごく荒いタッチとなりました。( ↓ 6 )

### 〈筆者〉

米子は日本画をかなりやっていた。米子は股関節炎で2年間子供のと き入院、母親がかわいそうに思って絵を習わせた。そのの教わり方が、お手本を描くよう で自由さがないからいやになった、その頃佐伯と知り合ったとある。……米子の絵の見方はしっかりしたものであつても不思議ではないと思われる。

今回の引用のくだりだけで3項目に該当し、これに生来の3項目(1, 2, 4)を加えると6項目になる。「演技性人格障害」と判断される基準の、8項目のうち5項目以上を超え、完璧な「演技性人格障害」患者であつたいえる。

こんな風に一時は米子悪女説を考え、佐伯の気持ち、絵の描き方、病気を調べ始めた。しかし佐伯祐三の評伝を調べるにつれて疑問が噴き出してきた。

私は本格的に佐伯研究を始めることにした。この『天才画家佐伯祐三の真実』によると、佐伯は吉蘭周蔵というスパイによって金銭を授与されフランスにも行くことができ、妻米子が佐伯祐三に売れる絵を描く指導をする、佐伯がもともと精神に異常があるなどと書いてある。不思議とは思っていたが、その後『佐伯祐三のパリ日記』という本を手に入れ、米子の加筆説を信じるようになってしまった。私は数年間、これを信じ佐伯祐三の評伝を調べながら落合氏に会いに行ったりした。落合氏はもちろん米子加筆説論者であり、佐伯の絵



の多くは周蔵のもとにあったとしている。

後述するが、パリ日記の編集者にも2回会見した。佐伯祐三の評伝、画集集め、問題となった武生市の資料（吉蘭明子氏から寄贈を受けて美術館をつくる計画ができ、その作品に疑問がでたため識者らがその調査を行ったもの）吉蘭明子氏の「自由と画布」佐伯祐三に関するあらゆる新聞記事、週刊誌を集め検討した。ここで事件を整理しておく。

#### 佐伯祐三贋作事件年表

1. 平成5年9月～12月 吉蘭明子氏「自由と画布」発行
2. 平成6年 吉蘭明子氏、都城市・遠野市・武生市に佐伯作品の寄贈申し込み 武生市が申し込みを受ける
3. 山甚氏、11点を4億円で購入
4. 平成7年 匠秀夫編著『未完「佐伯祐三の巴里日記」』発行
5. 平成7年3月 武生市、寄贈作品について疑問が起こり調査開始
6. 平成7年11月13日 佐伯作品・資料に関する調査委員会の最終答申まとまる。「限りなくクロに近い」
7. 平成7年12月22日 武生市寄贈絵画全て返却
8. 平成8年4月19日 落合豆氏「武生市佐伯作品・資料に関する調査報告」に対する吉蘭側意見及び釈明

9. 平成8年から平成14年 中島誠之助氏名誉毀損裁判

中島氏が『骨董の真贋』の中で「佐伯祐三の作品が吉蘭側に大量にあるわけがない。嘘の話は大きいほどひっかけやすいものなのです」という記述に対して、吉蘭明子は、名誉毀損で6百万円の損害賠償を請求する訴訟を起した。この裁判は吉蘭側の負けで終わっている。これについても後述する。

10. 平成9年落合氏『天才画家「佐伯祐三」真贋の真実』発行 これは武生市寄贈絵画全て返却と武生市佐伯品・資料に関する調査報告に対する反論として書かれた。

11. 平成12年1月14日、共同通信配信（社会面記事）

◎女性役員に実刑判決 1億2千万円詐欺事件

知り合いの会社社長から一億二千万円をだまし取ったとして、詐欺罪に問われた岩手県遠野市の会社役員吉蘭明子被告（56）に対し、東京地裁は十四日、懲役二年六月（求刑懲役五年）の判決を言い渡した。

### 事の発端

平成六年、福井県の武生市に対して、岩手県遠野市に住む吉蘭明子さんから、佐伯祐三の未発表の作品多数と関連資料を寄贈したいとの申し出があった。武生市では早速、専門家の委員会を設けて検討してもらったところ、ホンモノの意見だったために、寄贈を受け入れ佐伯祐三記念館を建設する

ことにした。ところが、東京の画商団体から、それらの作品は偽作であるとの声明が出されたことから、吉蘭寄贈品の真贋を巡って議論を呼び、武生市側では再度委員会で詳しく検討したところ、今度は一転して、ほぼ画商団体の主張通り、偽作臭いという結論に落ち着き、結局、美術館の建設を断念という結末で終わる。

### 自由と画布

吉蘭明子の父周蔵が長女である明子に「佐伯祐三についての遺作遺品をいずれ世に出してほしい、しかし長男、緑が死亡するまでは現状にしてほしい」との遺書を残したとある。よって佐伯祐三さんの名前は我が家でも語られることなく30年眠っていた、昨年緑が亡くなりましたと続く。

この小冊子を発行するため河北、富山、巧、陰里、三輪、山尾先生の賛同を得、また阿王桂氏に尽力していただき「佐伯祐三を知る会」を発足させ、ようやくこの小冊子の発行ができた」と記されている。この当時の美術界の大物がすでにこの時明子氏と知己となっている。どうやって彼女は彼らに近づいたのであろうか。多額の金が動いたという噂がある。

この最初に出版された明子氏の「自由と画布」には佐伯祐三に周蔵が金の面倒をみたことになっている。

祐三は病気のため牢屋敷に閉じ込められ、親兄弟からも疎まれていたとされ、「親や兄弟は当てにできぬのです」と周蔵

に佐伯家は十分の資産があつたにも拘らず、金の援助を申し入れまでさせている。また精神分裂予備軍などとされている。「自由と画布」は吉園明子の父周蔵が、佐伯祐三の精神的、金銭的援助をしていたと記している。佐伯を援助したお金の出所は周蔵の父からと最初は記されている。

## 第2号 自由と画布

阿王氏が私に何度も質問されたことのひとつに、周蔵の金銭の動きの確認でした。

ひとつには、周蔵が大正8年から昭和3年頃までに、佐伯さんに都合するだけの、金銭に対する力があつたかどうか。

二つには、周蔵が父、林次郎に無心した場合、それに対応できる資産や、処分するなりなどの資産があつたかどうか。

三つは、資産があつたとして、先祖から継いできたものを林次郎が、処分して用意したかです。

美術界に縁のなかつた私は、これは大変面倒なことに巻き込まれてしまった、と思ひました。思えば私が阿王氏に相談したわけですし、ここは面倒になる前にいちはやくこのことは取りやめようと思ひました。

(中略)

私より20歳近く上のいこと、周蔵の一番下の弟の未亡人

が健在だったりして、私の記憶違いが少し解明できましたが、吉園の生家ではいまだ財産を失くしたと周蔵の行為を怒っていることを知り、正直、私は仰天しました。

(中略)

周蔵は、当時としては大変な資産を売り払うことに専念したようですし……、

(中略)

私が疎遠だった叔母やいとこたちは、いまだに周蔵を許していないこと、憎悪しているということ、今回改めて知ることになりましたが、数人いる周蔵の甥の中の唯一人だけが、こんなことを話してくれました。「伯父さんは進歩的ないい人でした。金銭を使つたと言つても、それは父親が許したことだから、誰も異存を言うことはできないのです」

## 「自由と画布」第4号

しかし、突然次のように資金の出所が変わる。佐伯祐三さんに協力を惜しまなかつた人物は「母方の親戚の若松家である」として若松忠次郎の話が出てくる。彼が周蔵の求めに応じて金を与えたとなつている。落合氏は「自由と画布」は参考にするものではないと言われるが、ここまで書かれているものを無視していいものだろうか。

これらの「自由と画布」に書かれている経済的背景については武生市の調査によつて全て否定されてしまふ。

落合さんですら「自由と画布」は伝聞によるものだからあてにならない、こんなもの議論の余地がないと不思議なことに問題にもしない。「自由と画布」なる本はそんなに簡単に片づけられていいとは思えないのだが。

その後、落合さんに明子氏が相談に行く。そして武生市事件後『天才画家「佐伯祐三」の真実』が作られていく。この本ではカネの出所は佐伯をスパイとして育てるためとして大谷家からでている。それに加え周蔵の麻薬の栽培による莫大なお金ということになっていく。

米子は鬼女のごとく書かれている。そして祐三は「金がなく吉蘭周蔵がスポンサーで祐三の精神的経済的支え」となったとしている。

しかし多くの友人が残している評伝はまったく別のことを記している。

坂本勝、山田新一によれば米子がいかにいかいしく佐伯の世話をしていたか、また仲が良かったかが書かれている。また佐伯祐三は実家からの資金が十分あり、また絵が売れたため他人の金を必要としなかったとある

東京に来たとき祐三は70000円という大金を兄祐正から父の遺産分けしてもらっている。これは今の金で70000万円を越える金であろう。また母から十分な仕送りを受けていた。第2次渡仏の時、佐伯家の事情で金が出せなかった。

世界大恐慌もあり、また兄祐正の結婚にもかかなりの金が使われたであろう。それで第2次渡仏にあたり、白川朋吉を会長とする佐伯祐三の絵を売るための画会が組織された。

「スケッチ版4号1枚現物と引き換えで、2000円で買ってもらうことになっていた。20号の場合は1000円後払い。私はやっと3枚を親戚に買ってもらったが、白川のほうはすこぶる成績がよく60000円の会費が集まった。当時の私の毎日新聞社の月給は90円であった」（坂本勝）

また次の新聞は佐伯の絵がパリで売れていたことを示している。

1991年1月17日 共同通信

◎佐伯祐三の作、パリで発見 モンパルナスの裏町描く

【パリ十七日共同】日本の近代洋画の代表的画家佐伯祐三の知られざる作品が十六日、パリ北東の郊外、ポントワーズ近くの美術倉庫に埋もれているのが見つかった。この作品はパリのモンパルナス周辺の裏町を描いた20号（縦六〇センチ、横七二・八センチ）の油絵で、佐伯画伯に詳しい美術評論家の朝日晁氏（62）＝東京都大田区田園調布本町＝がこの日、倉庫で本物であることを確認した。

特徴のある自家製のカンバスや、糸くずを絵の具の中に塗り込めたような独特のタッチ、サインの表記から見て「一九

二七年の暮れごろに、死を前にした激しい執念で取り組んだ作品」と同氏は話している。絵の裏側にはフランス語で「日本人画家佐伯の作品アベニュー・ド・メイン。佐伯は一九三〇年（注Ⅱ実際は二八年）パリに死す」と記してあった。

さてこの画会で得たお金は60000円、米子の実家に3000円渡し、月々返済してもらおうということで30000円の金を持ってフランスに向かった。フランスでは佐伯の絵を路上で買っていく人が増え画商もつこうとしていた。つまり佐伯はそれほどお金に困らなかったのである。ただ異常に金使いが荒かったために、金が必要な時は兄に金送れという文章を残している。

### 佐伯祐三の兄へのハガキ

消印は1924年6月25日クラマール。

その後はご無沙汰しました。この頃は如何御暮らしますかこちらはもう御金がなくなつて困っています。こんど御金がきたら一日何金かきめてそれで生活スルツモリです。沢山御金をつかつた事を非常に悪く思っています。

パリーのこの夏は大変涼しくて冬服でないとい寒い日はいくらもあります。別にヒシヨに行かなくてもよい気候なので。パリーもヒシヨに行く人は少ないです。私たちは来月でこの家をきり上げて南フランスへ十月一日に行くつもりになっています。

す。そこで四、五カ月おくります。生活費はここよりかかりません。田舎ですから伊太利の国境に近いところです。只々お金のつくのをまっています。それではお身体を御大切にこの絵ハガキは。パリーで有名なマドレーンと云うお寺の画ハガキです。

### ソムラールのホテルから祐正宛て葉書

十一月二十九日 巴里にて

一週間以前より巴里に来ました。田舎を引き上げて——只今ソムラールに居ますが二三日の中に宿ヲカエマス。さて今自分は米子が病氣の為金が必要で。二月初めにいただく御金を一月のはじめに電報カワセデオクツテ頂きたいのです。オリ入ツテ御ネガイシマス。理ニ合ワナイデシヨウが実に困りますから必ラズ御願イシタイデス。田舎の方がケイザイニイクハズデスが米子が病氣ノタメヤムナク巴里ニイマス。一月カラ又田舎へ入りタイト思ツテイマス。ヨロシク御願イシマス。コノ手紙ツキ次第巴里シヤトウダン日佛銀行方佐伯祐三ニシテ下サイ

字カズガ少ナクナリマスカラ

これらの手紙から兄祐正が弟にそれまでも乞われる通り送金し、またその後もそれを続けたと考えられる。



にも拘わらず『佐伯祐三の巴里日記』『自由と画布』では佐伯祐三の両親は兄祐正を特別に可愛がり、祐三が家族に疎んじられていたことが強調されている。なおかつ親や兄弟はあてにならず金がないとし、そのため佐伯祐三は周蔵に対してお金の無心をし、周蔵との深い絆があったとしている。対して佐伯の友人山田新一は『素顔の佐伯祐三』で、祐正の弟に対する愛情は深く莫大な仕送りを惜しまなかったとある。

「山田が佐伯の死後、一年ほどしてまっすぐ佐伯の生家光徳寺を訪れたところ、彼の母上は文字通り走りつつ転びつつ玄関の式台に来て〈秀か〉といって泣いた。異国に寂しく散った愛児への母上の愛惜は、一方的なものでなく、その死をいつまでも信じかね、僕の不意の訪れを、秀丸の帰国と錯覚し、つい僕もほだされて、乞われるままに泊して佐伯の霊を改めて慰めた」とある。祐三は愛情深い家庭の中で育っていたのである。

『未完「佐伯祐三の巴里日記」』 著者 巧 秀夫

この本では明子氏のワープロ稿が最初に出てくる。あとは周蔵との関係と米子の加筆を強調するだけのために書かれている。人が日記を書く場合、パリに着いた感動や、人との交流、絵を書く場所を見つけた感動。どうしてすばらしいのかなどを書くはずであるが。

この日記には関西弁で書かれたところが多々認められる。筆者も関西出身であるが手紙などはまず標準語で書く。日記なども書体にする時は関西人は標準語で書く人が多いと思う。

つまり俺のもんをつくらなあかんちゅこちやな  
やぶの云うとりあみださなならん  
あみだすまで俺は  
生きられるやろか

この文章と同じことを書いている佐伯祐三の文字が隣のページに表記されている。巧さんの考えで実物をそのまま出せということだったようだ。

関西弁を使う私にはこの文章はおかしいと感じる。関西弁はリズムやイントネーションがそれとなくでてくる。まず、「つまり」ではじまるのはおかしいし、「あみださなならん」ではなくて「あみださなあかん」である。無理やり関西弁にしている節がみられるのだ。

私は或る人の紹介でパリ日記の編集者と会うことができた。この頃の私はまだ米子加筆説を信じていた。

佐伯祐三のパリ日記編集者と1回目の会談

土方定一さんという方が鎌倉（神奈川県立近代美術館）か

ら日本の作家を評価することを始めた。土方さんが朝日晁氏（現代、佐伯祐三研究の第一人者とされる）を都立の美術館に追いやった（当時は鎌倉のほうが都内より上であった）。

朝日晁氏は私生活上のトラブルなどで都内に飛ばされ、匠秀夫さんが副館長になった。米子と佐伯がお互いに筆を入れる、そういう時代はそれでよかった。佐伯の絵を神戸の市長などが持ち上げようとする動きがあり、大阪の人たちが高値をつける、佐伯の絵は異常な値上がりをするようになる。これに便乗したのが朝日晁氏である。これが大きな災いとなる。長崎の横手貞美（医師の息子）は山口長男とともにパリに行くが結核で死亡。山口長男がその絵を持って帰る。朝日晁氏はこれを展覧会に出品するといつて借りて帰るがそれらの絵は行方がわからなくなってしまうものがある。

朝日晁氏は、広島的美術館で公金横領事件を起こす（佐伯のパリの足跡をたどるといふことで出張費がでた、ファーストクラスをエコノミーに変えた）。画廊でも袖の下を欲しがる。新人作家の絵を美術館に入れてやるといつてタダで手に入れたものを、後ろで金をとる。そういう噂が立ち朝日晁氏の評判は悪かった。

匠さんに言わせれば「朝日晁氏は日本では佐伯研究家を通っているが、佐伯の心の内などにもわかっていない、内面をもっととらえるべきなのに」とのことであった。

資料によると吉蘭周蔵は特務機関として動き、麻酔薬としてケシ栽培をする。その周蔵を佐伯と米子は訪ねていく。その医師と米子はくつついてしまう。その聞き役として回るのが周蔵。（その資料の中では米子の男関係は、パリで佐伯らと共に絵を描いていた荻須高德などが知られている）。周蔵が世話をして佐伯をパリにやる。できるだけ記録を書いておけとわたしたのがこの日記帳『佐伯祐三のバリ日記』である。

それとともに、吉蘭コレクション（佐伯祐三作とされる絵画）と大量の資料がでてきた。その資料には佐伯の絵は米子に加筆したものと書かれている。

朝日晁氏は米子のところに入りびたる。日動画廊、米子、朝日晁氏の証明書つき、絵の値段は落ちない。絵の値段はますます上がる。

米子の線は細いが佐伯の線は太く荒々しいもの。真作が贋作かどうか、この二つの反対意見はお互いを全面否定するものである。つまるところこの贋作事件は白黒がつけられていない。

一方、伝え聞くところによると吉蘭明子さんの旦那さんが喫茶店をしていて佐伯祐三らしき絵を飾っていた。この人も絵を描いたそうで、この人が描いたという可能性もある。

この編集者の弁。この本の40ページから92ページの「吉蘭周蔵と佐伯祐三」という文章は、吉蘭明子さんのワープロ

で打ったものもとになっており、原文照合ができていない。原文を見せてくれるように頼んだがだめであった。つまりこの部分は編集者がチェックできていない。ワープロ原稿であるため本物かどうかもわからないとのこと。さああと50枚で原稿ができるという時、匠さんが亡くなってしまおう。

そこで河北倫明さんにこの本の序文を書いてもらうことになった。河北倫明さんは当時美術界の大物であった。なんと彼は1週間で序文を書いてくれた。川北氏の弁は偽物を本物というのとはかわいが、本物を偽物というのとは許せないということであった。

このパリ日記に書かれた佐伯の年譜に関して朝日晁氏から内容証明つきで抗議がきた。匠秀夫さんの年譜は朝日の年譜の盗作であるというものであった。20年前に中央公論に匠さんが佐伯祐三の年譜として出したもので第一版にはのつていたが、第二版では(M君がそのへんのことは知っているとのこと)その年譜は削られていた。第二版を朝日晁氏が見て出版停止を求めてきた。内容証明書つきできたものに対して、そんなことはないと言返事をしたがまったく答えが無い。電話を入れたら、朝日晁氏はM君が第二版を持ってきたからだとい他人のせいにして、対応がすごく悪かった。しかし形の上では彼は謝った。

出版統制というのがあり、簡単に言う小さな出版社は全

国の本屋に本をくばれない。形分社の本を置いてくれるところは全国で10箇所。本を出しても売れない、おかしいと思つて聞きに行くと、2, 3人男が来て売るなど脅かして帰つたということであった。

筆者はパリ日記について、「これを佐伯祐三が書く時、妻の米子はそばで見たり、盗み見しなかったのか不思議に思う。同じ部屋に住んで妻に見られたら困ることがたくさん書いてあるのだから」と尋ねた。

それに対しての答えは、「このパリ日記は周蔵が佐伯に送つたもの。また自分に送るようにつたもので、鍵がついており米子は見ていないであろう」とのこと。絵は黒が主体ではあるが色がついていた。しかし本のあとの方の絵は全て印刷の都合で残念ながら色彩がないようになっていた。

他に佐伯祐三と薩摩治郎八の妻千代子の手紙があった。千代子は佐伯に絵を習っていた。二人の愛の手紙も大量にあつた。これを書くとき祐三と千代子の寂しがりやの二人の純愛物語になってしまふので、本にはしなかつたとのことである。

その後も多くの佐伯評伝を読み佐伯祐三の素晴らしさを再確認し、吉蘭資料はまったくのたためではないかと思ひ始めた。

しかしどうしても作り話だと断言できなかったのは、米子

が自分が加筆しましたと書いている新聞記事が示されていたことである。

1995年11月11日 共同通信

「祐三の絵に私が加筆」 故佐伯夫人の書簡発見 支援者に遺作の譲渡懇願 作家像の見直しも

日本を代表する洋画家として、大正から昭和初期にかけてパリを中心に活躍した故佐伯祐三の妻で洋画家の故米子夫人が、かなりの数の佐伯作品を加筆して仕上げていた事実を自ら告白している書簡が十一日、共同通信社が入手した佐伯に関する資料から見つかった。

書簡は、生前の佐伯を物心両面で支援していた精神カウンセラー、故吉園周蔵氏あて。仕上げの手法を明示し、加筆すれば「売れる画」になるとして、吉園氏に手元にある佐伯の遺作を譲渡するよう懇願している。

夫人自ら加筆の事実を告白した資料が明らかになったのは初めて。内容が事実とすれば、夭折（ようせつ）の天才画家、佐伯の作品研究の見直しを迫ることになりそうだ。

見つかった米子夫人の吉園氏あて書簡は全部で十一通。和紙やノートの切れ端に、鉛筆や筆で書かれている。岩手県遠野市に住む吉園氏の長女明子さん（51）が所有している。

米子夫人が加筆を明かした書簡は縦十八センチ、横十四センチの和紙二枚に鉛筆でびっしり書き込まれているが、日付

は入っていない。

全国裁判長選任鑑定人が筆跡鑑定。米子夫人が佐伯の友人の洋画家、故荻須高德にあてた昭和六年三月二十五日付の書簡と比較した結果、同じ米子夫人の筆跡と判明した。

夫人は佐伯を「秀丸」と幼名で呼び「秀丸そのままの絵ではだれも買っては下さらないのです。私が手をいれておりますのよ。秀丸もそれをのぞんでおりましたし」(文中の旧仮名遣いは新仮名遣いに変更、以下同じ)と、佐伯の同意を得て加筆していたと主張。その上で「画つらの絵具や下地が厚いものには ガッシュ(不透明の水溶性絵の具) というものをつかい 画づらをととのえ また秀丸の絵の具でかきくわえますでしよう すこしもかわりなくよくなりますのよ」と具体的に加筆方法を説明している。

米子夫人は「秀丸はほとんど仕上げまで出来なかつたのです」とした後「あなた(吉園周蔵)のお手元にあるものが仕上げれば、すぐに売れる画になりますのよ」と、仕上げた佐伯の作品による展覧会の開催を吉園氏に持ち掛けている。

米子夫人は明治三十年七月生まれ。東京・銀座の象牙(ぞうげ)商の長女で、水墨画の北面を学んだ。大正九年十一月、佐伯と結婚し二度の渡仏にも同行。佐伯が昭和三年八月十六日に三十歳で亡くなった後の同年十月末に帰国。洋画家として活動したが、同四十七年十一月に七十五歳で死亡した。

同時に見つかった書簡の中には「告別式(同三年十一月二十五日)のお知らせをおいてまいりました」と書かれた、帰国直後の十一月十四日付のものや、吉蘭氏から遺作が大量に送られて来たことを喜ぶ、年不明の一月二十日、二十四日付のものなどがある。

このため、書簡は米子夫人が帰国直後の昭和三年十一月から翌年の夏ごろまでに書かれたと推測される。

美術評論家の坂本満・聖徳大学教授(美術史)の話「佐伯祐三の作品に米子夫人が加筆して仕上げているとか、佐伯の作品といわれるものの中に、やはり洋画家の米子夫人自身の作品が混じっているとのおわきは、二十年ぐらい前からあった。書簡に書かれていることが事実なら、近代の日本美術史と佐伯の研究に重大な影響を与えることになるだろう」

この新聞記事のため米子加筆説ひいては吉蘭周蔵なるものを否定できなかった。そういう時期が数ヶ月続いたのち馬田昌保著『二人の佐伯祐三』という本を手に入れた。この本には武生事件が詳細に書かれていて、新聞記事のいい加減さが暴露されていた。

### 「全国裁判長選任鑑定人という言葉」

この記事を書いた記者は「全国裁判長選任鑑定人」などというものが存在しないことすら気がつかなかった。その後こ

の記者は、なんとかしようとして走り回る。そのため、また多くの人を迷わす記事を出してしまった。またこの記事に関して、落合氏の『天才画家「佐伯祐三」真贋事件の真実』161頁に下記のように記されている。

「折から共同通信社の記者が、別件で落合事務所に来た。明子の依頼により、私は米子書簡の幾つかと、祐三が画用紙の裏に文章を書き込んだ〈郵便配達夫〉のスケッチを託して、自分に代わって筆跡の鑑定に行ってもらった。多忙を口にする鑑定人も、マスコミ記者を優先するとみえ、大至急で鑑定作業に入ってくれることになった」

つまりここで記者が特ダネ欲しさに吉蘭側の手に簡単に落ちたことが示されているのである。新聞記事のもととなっているのは吉蘭側の資料だったのである。

私はようやく眼がさめた。武生市の資料及び自由と画布を手に入れ、またこれにかかわる当時の新聞、雑誌をすべて集め、落合氏のおこした中島氏名譽毀損裁判記録まで眼を通した。これについては後述する。そして、ようやくこの贋作事件の真相がわかったのである。この贋作事件のおかげで他の佐伯の文献を多く読むことができた。

### パリ日記編集者との2回目の会談

パリ日記の編集者にも2回目会いに行き、彼が後悔してい

ることも納得できた。

私は、まず編集者から「あなたは、この件について本当と思えますか？ うそだと思いますか？」と聞かれた。私は「パリ日記を含めて、全てうそであると思います」と答えた。

さらに編集者は「吉蘭明子とはどういう人物であったか？ 千代子と佐伯の手紙をどう思うか？ また落合さんの本やHPについてどうでしょう」と私に問いかけた。

「落合さんが書かれているのは一見本当のように思われますが、実はまったくその根拠が書かれていない。周蔵がパリに行ったことを証明しているように見えるが、実はちゃんとした根拠はない。落合さんの調べた周蔵や明子の経歴もちゃんとした出所はない。筆跡鑑定についても正しいとは言えない。落合さんについて、どう思われますか？」

巧さんはこの編集者に「どう思うか？ これ本物と思うか」と何度も聞いたそうである。編集者は「これが本物であろうと偽者であろうと、画商が牛耳る世界に一石投じるのではないか」と答え、出版の運びとなった。

吉蘭側によって佐伯の水彩画はたくさん持ち込まれたが、とても見られたものではなかった。

佐伯の手紙や千代子の手紙も一時編集者のところにあつた。しかしそれは本が出版されたのち持ちかえられてしまった。

私は「なぜ3階、2階に住んで顔を合わせられる距離にいる

のに大量の手紙をやり取りし、そのラブレターが他人の家に保管されるでしょうか？ お互いに家庭を持つ二人が、そういう手紙をいかに親しい人とは云え、見せて預けるといううなことをするでしょうか？」

編集者は次のように述べた。

「佐伯の手紙や千代子の手紙については一切関心がない、またこれに関しては二人のプライベートなことなので触れなかつたとのこと。佐伯祐三についてはもう関わりたくない。なにを聞かれても答えたくない。ただ佐伯祐三の贋作は朝日も米子も祐正も少しは手を染めたであろう、また画商も関係していたであろう。落合さんや他の関係者とも会ったことがある。佐伯の水彩というものも見せてもらったが、まったくだめなものであった。これは私の意見でもあるが、落合さんの立派な経歴を考えると不思議な気がする。どうして、ああいう文章を書くのか。調べられたら根拠もないし、また常識から大きく外れている」明子さんについても「世界的に有名な画家の絵を所有しているから見せてあげる」と何度か言われたが、機会をつくって見せてもらおうとしたがその約束は守られたことがなかった。

この会談のあと吉蘭明子について調べられることはすべて行つた。

## 贋作事件の新聞報道について

この記事は事件の決着を示す一つになるであろう。

1999年12月22日 共同通信（社会）

◎女性役員に懲役5年求刑 1億2千万円詐欺事件

知り合いの会社社長から現金一億二千万円をだまし取ったとして、詐欺罪に問われた岩手県遠野市の会社役員吉園明子被告（55）の公判が二百、東京地裁（近藤宏子裁判官）で開かれ、検察側は「車の購入など欲望を満たすため、被告を信頼していた被害者を裏切った」として懲役五年を求刑した。

弁護側は最終弁論で「被告が所有していた洋画家故佐伯祐三氏の作品とされる三十六点の絵画などを被害者に渡し示談が成立している」と述べ、執行猶予付きの判決を求めて結審した。判決は来年一月十四日。

起訴状によると、吉園被告は一九九四年十一月、知り合いの東京都内の不動産管理会社社長に「絵画を売って神奈川県鎌倉市の土地の固定資産税を払うつもりだが、来年になりそうなのでそれまで貸してほしい」と言い、一億二千万円をだまし取った。

吉園被告が示談で被害者に渡した作品は、福井県武生市に寄贈される予定だったが、画商らに一部を贋作と判定され、

真贋論争に発展した絵画も含まれているという。

絵画を買うのに売り手を信じ鑑定もせず、何千何億という金を支払う人々がいるということが驚きである。佐伯の贋作に限らず世に有名画家の贋作が美術館やコレクターの間に本物と信じられて存在することは推して測るべきであろう。

下記の週刊誌なども真実を示す一つとなるであろう。

## 当時の週刊誌の報道について

AERA

明子はさまざまな人物に資料を小出しにしていた。武生市に寄贈した作品以外で、すでに複数の画商や実業家に分散して売却してしまった作品もある。

落合氏の著書で（127頁）事実、「明子は山甚に佐伯作品11点などを代金を受け取ってしまった」とある。

## 週刊新潮

「河北氏をその気にさせた女性とは？」から抜粋

吉園さんを知る人の中には「慶応大学医学部卒」あるいは「東邦大学医学部卒」と彼女から聞いた人もいる。

鎌倉で吉園さんに2億5千万円という大金を貸した人がいる。「そのころ吉園さんは天声人語を執筆している」「彼女の

生い立ちが彦根の井伊家の出身」で、「実の父がもと彦根市長の井伊直愛さんだ」というのです。「障害者の福利施設を作りたいから寄付を」「ワケあって吉園家に養女にでたのだが、その井伊家と吉園家で起こった事件の後始末に大金が必要になった」と。

こういうことで2億5千万円も貸してしまった。彼女の話は後で全てうそだとわかった。このことで訴えられかけたので、実業家から4億円を手に入れ、返済にまわしている。

その鎌倉事件を落合氏はその著で次のように記している。「鎌倉で昭和63年ごろ、人助けのため急に資金の必要があったとき、明子氏がかかっていたマツサージ師が聞きつけて、融資を申し出てくれた」

筆者は融資とはなかなか受けられないものと考え、それが相手から申し込んできたことになっている。これは常識はずれ。週刊誌に書いてあることはまったく逆である。

鎌倉署内では、カンノ刑事が威圧的な調子で「これから詐欺容疑で取り調べる」と言い始め、「早く払ってやれ」と強請したというのである。

刑事が首になるかもしれない行動をとるであろうか。

落合氏に言わせるとすべて弁護士もぐるで、明子氏は陥れられ2億3千万支払らわされたとなっている。それが本当

ならこの弁護士も訴えられてもおかしくない……。

さて週刊誌に話を戻そう。

吉園さんを知る別の知人によると、そのころ「ギャラリーとぼ舎」という画廊を持ち、すさまじい勢いで絵を買い捲っていたという。

そこで「ギャラリーとぼ舎」をインターネットで検索してみると、個展…古都鎌倉有韻展（ギャラリーとぼ舎／神奈川鎌倉）12／16～28というのがでてくる。昭和62年（1987年）には鎌倉に「ギャラリーとぼ舎」は本当にあつたようだ。

明子氏は美術界の多くの大物に当時後ろ盾になってもらっている。どうやって彼らに近づいたか、それ相応の資金がないとできないはずである。

河北氏の次男の弁（河北倫明氏は美術界の大物であった）。父と明子さんとのことではいろいろと、たとえば、病院の特別室への入院代は彼女もちなのではないかといった噂が立っているようですが、ちゃんと自分の通帳から出しています。

父は無防備な性格で、本物と思ったからそういったんだという感じでしたから、しょうがないですよ。遺族のくせに、冷たいようですが、父が年をとって盲になったといわれれば、



それもしかたのないことだと思えます。

## 週刊文春

その渦中の人物、吉蘭明子氏が今回小誌に口を開いた。  
今回の真贋騒動については？

「もうわからない。でも今はもう私が作ったということになつているんですね」

佐伯祐三贋作事件の核心を握る、このコレクシヨンの人物はご本人でも真贋がわからなくなつていゝことをあつさり認めたのだ。

「父が作ったのかもしれないですね、ハハハハ。今回は自信がないですね。言われっぱなしで。父から聞いたわけじゃない。父との会話で佐伯祐三さんの名前は一度も聞かされたことがないんです。残された父の遺書を見ただけなんです」

贋作派のボルテージは上がるばかり。その根拠はこれまでの行状にある。経歴詐称、火災保険や生命保険の詐欺疑惑、贋作絵画の販売を数え上げるときりがありません。

さてこのような人によって書かれた「自由と画布」、またこの父が残したという佐伯祐三に関する資料、大量の絵画を信じていいものだろうか。

武生市では寄贈された絵画および吉蘭資料が本物であるかどうか調査することになった。筆者はこれを手に入れじっくり読んでみた。

## 武生市 調査報告

この資料は膨大で、佐伯祐三およびこの資料に書かれた人物の係累者が大勢名を連ねている。これを簡単にまとめると次のようになる。

周蔵日誌は数ページ分の写真を除いては、全て明子氏のワープロ稿のみで提供された。市や研究者の要請にもかかわらず、遂に明子氏は現物を全体として提示されようとはしなかつた。それだけではない。明子氏は再三にわたり資料はもつと沢山ある、油彩画も200点近くあるといいながら、だれにも全貌を明確に示そうとはしない。

ただ伝聞の情報と、出所の不確かなコピー資料、たとえば「周蔵の遺書、周蔵が昭和3年に父親に出した葉書数通、佐伯米子の昭和3年以降の手紙数通」だけが出回るといふ、最悪の事態が続いているのである。

これでは厳密な学術調査など進めようがない。もし明子氏が父・周蔵由来の作品・資料についてしかるべき判断を真に望むなら、周蔵の経歴その他に關し正確な情報を裏づけを以つて自ら提供し、なおかつ吉蘭資料・作品の全貌をコピーでなく現物の形で明らかにする必要がある。

しかしこの調査は市側からの要請で打ち切りになつてしまふ。市長の責任論に発展する可能性があるからだ。

『天才画家「佐伯祐三」真贋事件の真実』（落合莞爾、時事通信社）

落合氏は、この事件の途中から吉蘭側の代理人として関与し、吉蘭家の保有する作品と資料がホンモノであることを立証するために調査を行い、この本を出すことになるが、この本は最終的に偽作であるとの結論を出した武生市の調査に対する反駁の書となる。

氏の著書の最初に「自由と画布」は伝聞と随想だから、これをまじめに取り上げたほうが悪い。『巴里日記』も無垢な女性明子氏が匠の言うままに、本にしてみましたから、これも誤解を招くとしている。つまり上記の二つの本は明子氏がつとも深く関与しているが、落合氏の著書は、まずこれらの否定から始まっている。推理小説として読めば多少面白いかもしれない。言い古された言葉だが、「事實は小説よりも奇なり」を地で行くと言うところだろうか。

焦点は、これらの作品を取得した人物、吉蘭明子の父親である吉蘭周蔵である。作品一つが億単位で売買されることもある佐伯祐三の未公開の作品を、なぜ無名の吉蘭周蔵が大量に持っているのか。この点、武生市の委員会は、周蔵と佐伯との接点は見つからず、また周蔵には経済的な裏付けもないと結論づけた訳だが、落合氏は、綿密な資料の収集と分析を重ね、周蔵は帝国陸軍の上原元帥につながる特務、いわゆる

スパイであり、社会の裏面に隠れながら佐伯祐三を支援してきた人物であるという、意外な結論を導き出す。

これだけをはしょって書くところ荒唐無稽な“とんでも本”に聞こえるだろうが、この本の中では、多くの資料を丹念に当たり、綿密な調査を踏まえて証明している。そして、証拠を積み重ねながら、吉蘭周蔵を生き生きと蘇らせて行くところは、まさに推理小説顔負けである。

しかしおかしなところも多々認められる。矛盾がおこつても仕方がないですませられるようになっていく。佐伯は周蔵に自身の書いた文章を何度も書き変えさせ、そのため日にちの間違いなどが起こるのである。

『周蔵手記（大正15年）「なぜかくも改訂を重ねるのか」佐伯の希望通りを記帳するのに、正月の5日までかかった。まことに奇妙な人物で、ずっと前に書いた内容を修正せよと求められ、また書き直しである。内容変更の要点は大正5年に出会ったときの状況をやや変更し、自分をより悲劇的に書き直した箇所が多く、また、自身の言動を批判的に形容する箇所も増えた。何のための変更かと思ひ質問してみた。「これは大谷光瑞に見せたものであろう。それを書き換えては、おかしなことならぬか」すると佐伯は「大谷さんはこんなもんですよ」というだけで返事らしい返事もない。思うにこれは呉博士の言われるとおりで、これは佐伯自身のための記帳

かもしれない。つまり、英語で言うプレッシャーを、自分にかける目的であろうか。』

反面、もう一つの面白さは、武生市の態度の変化、新しい佐伯祐三作品の登場を喜ばず、それを抹殺しようとする画商団体の強引な動き、それに協力して権威づける評論家たち、さらに偽作キャンペーンを展開しお先棒をかつぐ一部のマスコミと言った形で、日本の美術界のどろどろして閉鎖的な側面が浮き彫りになっていくところだ。

次に件のサイトから落合氏自身の言葉である。

《序論 佐伯祐三の画業》 落合莞爾

洋画の天才佐伯祐三の事績については、『周蔵の手記』『救命院日誌』のほか多くの資料が吉蘭家に残されていた。いずれも極めて信憑性の高い一級資料である。私（落合）は平成八年三月以来、月刊雑誌「ニューリーダー」に連載中の「陸軍特務吉蘭周蔵の手記」のなかでそれらを解読してきたが、佐伯の画業そのものには触れなかった。それは美術専門家の出現を待っていたからであるが、すでに四年に垂んとするのに、誰も名乗りをあげなかった。佐伯の画業に関する真相の究明をこれ以上放置することは、読者の期待を裏切るほか、社会の損失を招くものであるから、自らの浅学を知る身とはいえ、敢えて吉蘭資料を整理して佐伯の画業を追求し、いわ

ゆる公開作品と吉蘭佐伯との関係を明確にしようと思っ》

前述書評にもあるごとく、事件は自治体や美術界全体を巻き込んで、それぞれの体質がいみじくも白日の下に晒されたという意味で、内容の真偽よりそうした事件そのものへの意義を改めて感じさせられるものであった。

結論から言えば、当該佐伯作品は「限りなく黒に近い灰色」として件の美術館構想は撤回され、関係者の過誤や不明が浮き彫りになった形で終わった。

しかし、この事件は諸々の美術展を主催する公立美術館の長、公募展の審査員となるなど権威と実績ある評論家、美術品の信頼性に係る修復関係者、現下の美術市場を構成する画商などを巻き込んだものであり、マスコミの報道のあり方を含め、その社会的責任や影響力を考えると将来に向かっこの本邦美術界に看過できないに重大な問題を残したものである。とりわけ、件の落合氏のものを含めもろもろの出版物は佐伯本人の生きざまや名誉に関わること、妻米子の人格、名誉を否定している。

それだけでなく佐伯の縁者に関する事後の配慮等は一切欠いている。今現在でさえインターネットの世界ではまことしやかに吉蘭説を真実のように流し続けている。このまま曖昧模糊として終わらせると言う「言い放し得」は許されないことであり、それへのけじめはつけておかなければなるまい。

当稿のおいてはそういう立場になつて一言を記すものである。

事件のポイントは幾つかあるが、それらの信憑性は一にかかつて「吉蘭明子」と言う存在に集約される、総ては彼女から出ていることであり、その存在如何により他の仔細は眞実か全くの作り事か、即ちその後の仔細を論ずることの意味・無意味が決するといつてよい。

武生市には作品 38 点の他「吉蘭資料」と言われる数多の関連文書が提出された。その内容は日記、メモ、手紙類、水彩画やデッサン、佐伯米子（祐三夫人）、千代子（薩摩治郎八の妻）の手紙類等数多くある。他にこれらの補足資料としての吉蘭周蔵の手による「周蔵日誌」や吉蘭明子編著による「自由と画布」は、眞贋を判定する上での足がかりとなる客観的事項が含まれているため、重要なものとして調査された。

先ずこれら資料を見て感ずることは、もしこれが全く何もないところから創作されたものだとしたら、その「シナリオ」を書いた者は「天才的創作家」といつてよいほど、微に入り細に渡り、如何にももつともらしく、読んだ者の十人が十人皆信じるであろう説得力を持たせるものである。事実、多くの地位も名譽もあるような学究・評論畑の何人かはこれを信じ、当該作品の眞性を語つたのである。

即ち、これらが全く創作されたものだとしたら一体誰が何の目的でこのような手の込んだものを創るのか、相당한見返りでもない限りわざわざこんな大掛かりなものを創るはずがない、もしかしたらホンモノではとも思わせるような内容である。

一方、その辺を穿つた見方で解釈すれば、佐伯贋作を公共施設・地方自治体へ、權威ある学究畑のお歴々のお墨付きつきで寄贈できれば、それ自体も幾ばくかの利益になるが（事実武生市はその予算を当初用意していた）、それ以外の所有する「贋作」を眞作として億単位でさばくことができる。出来が悪いと評価される作品だけでは不安が残る。そのため裏づけとなる膨大な資料を併せて出す、だから労を惜しまず、相応意周到で手の込んだものとなる。とても独りでは出来ない作業と考えて不思議ではないしろものである。

いずれにしろ、いかに複雑、膨大な資料であっても、この種のものには「一を知つて十を知る」ということが可能なのである。つまり、仮にその核心において明確な破綻や虚偽があったとしたらその後のことはウソの上にもつともらしく糊塗されたものに過ぎず、改めてその糊塗の眞偽を追いかける必要はないからである。

先ず佐伯祐三の親族の発言から述べる。

「私は、佐伯祐三のたった一人の兄祐正(光徳寺をつぎました)の長女として、昭和三年十月十五日に生まれ、光徳寺の光を取り佐伯光子と名付けられ、今は結婚して多田光子となつております。……なぜ死後六十六年もたつてから、百八十点もの絵や日記や手紙等、名前も聞いたこともない人のところから出て来たか不思議でなりません。山登(山本登次郎)さんの事は父は好く云つていたのに、それより多くの絵を買つたと云われる吉蘭さんとかの話は全然聞いた事がないのは何としても不思議です。

また、叔父(佐伯祐三のこと)はずぼらでのんきな人でしたから、こまめに日記を書くとか、手紙を沢山書いた等、全くうそとしか思えません。恐らく、上手く仕組まれた贋作としか思えません……」(馬田昌保著『二人の佐伯祐三』より抜粋)。

上記手紙文は、多田光子氏が事件の一方の当事者である武生市市長に宛てたもので、同氏の許可を得て馬田氏がその著書において公表した重要な証言である。この手紙の経緯については仔細後述する、次に佐伯祐三夫人米子の甥(米子の生家池田家長女で米子の姉よしの長男)に当たる池田泰治郎氏の同じく武生市長に宛てた手紙の一説である。

「現存する米子の妹愛子にも問い合させたところ吉蘭様という名前すら聞いた事も無いと申しております……」(前記『二

人の佐伯祐三』)。

つまりここでは、佐伯関係親族の誰もが「吉蘭」という名前を聞いた事がない、一切知らないということを言っているということを確認しておきたい。

中学の友人の阪本勝の『佐伯祐三』を筆頭として佐伯関係の評伝は沢山出ている。それら評伝総てに吉蘭の「ヨの字」も出てこない。佐伯と吉蘭周蔵の関係が、吉蘭明子、落合莞爾両氏の言うような密接なレベルにあるとするならこれは誠に不自然なことである。

問題の発端となった吉蘭明子から武生市へ寄贈されそうになった「佐伯作品」はその吉蘭周蔵所有のものである。したがって、問題となるのはこの吉蘭周蔵の佐伯作品所有に至る事実関係についてである。

佐伯作品の最大のコレクターは山本登次郎である。彼は真正銘の150点とも250点とも言われる佐伯作品を所蔵うち大阪市立近代美術館設立準備室に40点が寄贈され、これを元に東京府美術館での「佐伯祐三遺作展」が行われるなどその後の佐伯芸術の展示の礎となった。

自身「佐伯の滞欧作総ての蒐集を遂げることができた」と述べている。この多くの元となったのは米子夫人が持ち帰った作品とそれを分配した兄佐伯祐正の所有作品である。

一方、佐伯一家が第二次渡仏の際下落合のアトリエは画家

鈴木誠が留守を預かる形で使用していたので、佐伯死後の他の滞欧作は、以下のごとく友人で美術評論家でもある外山卯三郎のところへ送られた。

「……1928年の暮れになって、彼の再度の滞仏作が、日本に送り返されてきた。その荷物は全部私の家で預かり、整理した関係上、この時の作品の全部を見ている……」（外山卯三郎）「美之園」 昭和十年十一月号」

即ち、佐伯滞欧作について、互いの往来はあるものの、そのルートが明確となって語られ展示されているのは、米子、祐正、山本登次郎、外山卯三郎の四者であり、「吉蘭ルート」の百数点などというのは忽然と降って湧いて来た様な印象がある。

ところが、件の武生市寄贈問題に係る「研修会」で吉蘭明子側から一点の資料が明示された。それは、吉蘭周蔵宛の佐伯米子からの「作品借用書」で、遺作展を行うので百一点の周蔵所有の佐伯作品を借用したいとの申し出である。もしこれが正当な借用書だとするとそれは佐伯の妻米子による「吉蘭ルート」の正当性を語るものとなり、贋作への疑義総てが排除されることとなる。

落合氏の本（289ページ）

米子が金を得るために絵は周蔵から借用物だという証文に

ついて述べている。

昭和9年 牧野が珍しく困った看護婦の倉田由は、米子と仲良くなつて共同戦線を張り、事あるごとに口を挟む。現に「米子さんが義兄から、画会の売上金を取られないように、絵は借用物だという証文を私が書いて、難を逃れさせてあげたのよ」などと言っていた。（中略）

その書付が291ページ写真である。押した印鑑も「由」が市中で購入したつげ製の三文判である。世のなかには常識というものがある。

いくら仲がよくなったとは言え、他人の借用書を書き判子まで押す、こんなことがありうるであろうか。

真筆でないと言われて、後だしジャンケンのように、あれは代筆だったからと別の吉園資料がだされてくる。

やがて、この「借用書」の鑑定を含み吉蘭コレクションの「佐伯作品」、資料等に関する要望書が出される。それは、東大名誉教授で佐伯作品のコレクター・脇村義太郎、二科会理事山尾薫明、美術評論家朝日晃の三氏による、一切についての科学的検証の要請である。

前述の佐伯の親族である多田光子氏が武生市長に宛てた書簡とは三氏による上記要請がでた時期とほぼ同じ時期、即ち平成7年2月下旬に以下の要望書ともに出されたものである。

多田光子の書簡

○佐伯祐三が東京で吉蘭と言う人に経済的援助を受け、また精神カウンセラーとして診察を受けていたとは、父からも米子さんから全く聞いておりません。祐三は健康であり、経済的にも父から送金しておりましたので困っておりません。誰からも援助等受けていません。

○パリから吉蘭氏に絵を送ったなど、の事は父、母、米子さんにも一切聞いておりません。

○佐伯米子が吉蘭氏に絵画一〇一点を借りたとする借用書の筆跡鑑定を是非お願いします。

○佐伯祐三の絵画につきましては絵画鑑定、又、日記、手紙等につきましては、筆跡鑑定を公共の機関で科学的に検査して下さい。

何卒、速く検査結果を御報告下さいますよう御願ひします。

ここまでのことで以下の三点を確認しておく。

吉蘭明子サイドの文献を除き「吉蘭周蔵」の名前は一切出てきてないということ

○佐伯作品の搬送先ルートに「吉蘭ルート」の記録はないということ

○それに加え、佐伯作品の多くの修復を手懸けた「創形美

術学校修復研究所」の歌田真介氏が、持ち込まれた佐伯作品の総てに関し贋作と判断し修復を断つたと言う事実があるということ。

とりわけ最後の点については決定的なことと思われるが、以下論を進める。

武生市は平成8年1月付で《吉蘭氏由来の「佐伯作品・資料」に関する調査報告》というものを公にし、作品を真作とは認めがたい、資料は疑わしいとの旨により「佐伯美術館」創設に至る当初の企画総ての白紙撤回を表明した。この根拠は小林頼子特別研究員の仔細な調査報告においたものである。その小林頼子氏の報告に一貫している趣旨は「事実が確認できない」、「事実の不存在」、「事実の矛盾や齟齬」など、要するに判らないことだらけということである。これは勿論、小林氏の調査が不十分であったということではなく、「吉蘭資料」にはそう言うものが多く、それ故その信憑性が疑われると言う明確な結論に繋がるものであり、その意味ではそれに尽き、それ以上のもは望めない十分に信頼に足るものであると言える。

例は場違いだ、過日アメリカは「大量破壊兵器が《存在していないこと》を証明せよ」をイラク介入の大義名分としたが、これは誠に無理な話で、存在していない故に「存在し

ていけないもの」を「この通り存在していない」と証明することはできない。

そうではなく、何かを主張するならば先ずその存在を自ら主張しなければ、架空のものは無制限に主張できることにな



る。これが「立証責任」のイロハであろう。吉菌資料とは正にその意味で「架空の事実」の宝庫といつてよい。先ず「主人公」吉菌周蔵の総てが確認できない。『自由と画布』では、自分は精神科医と称している。「医師」として精神カウセリング施設である「救命院」を作ったが、先ずその医師？ であることが確認できない。次にその救命院とは落合氏によれば現住所で「中野区中央一丁目十一番地」にあつたという。

ところがその場所はその後、の神田川の改修工事により無くなった、つまりその場所は現在川が流れているところということらしい。地図を見ると確かにその通りである。しかし普通、公共工事に伴い建造物が撤去される場合は代替地の提供

等か何某かの保証がされるはずである。その代替地は確認されるだろう。それとも公共工事と供に都合よく消えてなくなったのだろうか？ つまり、「救命院日誌」（後出、佐伯と周蔵の「交流記録」以前に、救命院自体の物理的存在も怪しい。この他に、単純にその固有名詞についてだけでもおかしいものがある。例えば吉菌周蔵が裏口入学をし自ら退学したとされる「帝国医学専門学校」と言うのは実在しない。「日本医学専門学校」は存在した。長男の縁が出たとされる「海軍航空兵学校」と言うのも実在しない。「海軍飛行予科練習生」（予科連）は実在する。「全国裁判長選任鑑定人」などは噴飯ものである。つまりどこか似ているのであるがそれ自体ではないという名称が多く出てくるのである。

件の小林報告は仔細な追跡調査上、そうした、確認不可、架空の名称についての不自然を指摘しているのであるが、ここでなおその後のことを含み補足しておきたい。吉菌明子編著たるところの『自由と画布』という小冊子である。これは「医師？」吉菌周蔵と「患者」佐伯祐三の交流の記録を中心に諸々の「いわく因縁」を挿入させたものだが、最初は牧野という医師のカルテが佐伯祐三の血液型、肺活量体温などを記した文章が周蔵の診察風の語りとともに書いてある。その後はだらだらと武者小路実篤、徳田球一、中村屋の相馬、中村彝、薩摩治郎八など有名人と周蔵の付き合いがでてくる。



有名な人を紹介することによって、この小冊子を本物のよう  
に思わせるためである。

その一部を紹介しよう。佐伯の結核や精神病についても書  
かれているが、ここでは米子について四月十六日から抜粋す  
る。

「夫の主治医（吉菌周蔵）なら妻の主治医になって下されな  
いとおっしゃるでしょうか」

◎精神科医ですから、そうする方が良いと思うと答える。

「ああ、口惜しいこと。あたくし離婚しましょうかしら。佐  
伯を心配する先生を見ていますと、ときどき先生も佐伯も憎  
くなりますの」。

「何の病気かしら」「あたくしも、心の中を全部さらけ出せる、  
心からお信じできる方が欲しいですわ」「先生はあたくしをそ  
んなに弱くないって思っただけじゃないでしょうか。そして  
先生は弱い方が好きなのね」「でもあたくしだって泣きます  
のよ」

◎そのための夫でしょう。

「あら、佐伯をその為の夫とお思いになれて」「泣く佐伯の為  
の妻なのですわ」「あたくしたちは、絵に描いた夫婦なのです  
わ。それはどんなに長い生活がつかさなっても同じことだ  
と思えますわ。あたくしは佐伯にとって天女であり、ヴィー

ナスでしかありませんのよ」「でも天女であり、ヴィーナスで  
あるから、佐伯はあたくしと別れることはできないのですわ。  
たとえばあたくしがどなたかと通じ合いますが、佐伯はあたく  
しと別れたりしないでしょうよ」「きつと陰で泣いてしらは  
つくれていることでしょう。そして苦しむのですわ。天女で  
あり、ヴィーナスであるという、看板が汚れてしましますも  
の」

五月二十四日からの抜粋

困ったことになっているようだ。牧野さんの妻君と呼ばれ  
て行ってみるとどうも佐伯君の妻君とおかしいという話であ  
った。よく聞いてみると女中が現場を見たらしい。牧野さん  
は癡だから仕方がないとして、佐伯君に知れたらどうなるか、  
と思索した。牧野さんの妻君はできた人だから、佐伯君の心  
理状態を心配してくださった……。

このように米子を男にだらしな女とし、周蔵なる人物を  
政界にも通じる隠れた人物として登場させる。

しかし落合氏によればこうしたことも含めて佐伯は周蔵の  
「草」（スパイ）となっており、つじつまの合わないことも佐  
伯が書きなおしをさせたことによるとなっている。

（ 続 く ）